

みのおのおいたち その4

止々呂美地区 (三)

平安時代に設けられた比叡山
 浄土寺門跡領荘園の美河原庄
 (止々呂美庄) が二分され、文
 祿三年(一五九四)に上・下止々
 呂美村が誕生しました。これは
 豊臣秀吉が、年貢賦課や封建支
 配の基盤とするために「村切」
 と「検地」を行い、新しく設け
 た行政村です。

検地の結果確定した上止々呂
 美村の全生産高(村高)は、米
 換算で一七〇石余りでした。下
 止々呂美村については、太閤検
 地帳といわれる文祿三年の検地
 帳が残されており、そこでの村
 高は三〇〇石余りでした。

この村高が年貢賦課の基準額
 で、年貢の負担義務者には、村
 がなりました(村請という)。

領主については、上止々呂美村
 は幕府であり、天領として代官
 が支配しました。下止々呂美村
 の領主は、終始、備中(岡山県)
 岡田藩の伊藤氏でした。
 上止々呂美村では、延宝七年

のかたわら、柿・桃などの果樹
 生産がすでにあつたことを物語
 っています。村の規模としては
 寛政三年(一七九二)人口一九
 七人と牛一九匹、幕末の嘉永四
 年(一八五二)では四八軒、二

田県(藩)から大阪府へ出した
 「引渡書」を見ると、当時の同
 村では「一万五千俵」の炭生産
 があつたと記されています。山
 間の村であるため、豊富な樹木
 に依存した林業、とりわけ大規

品の林業が盛んで、市域の他の
 地区とは大きく異なる特色を持
 っていました。
 たとえば、大正一四年当時の
 この地区では、梅七〇石・栗八
 六石・柿一万六百貫・ビワ一万
 八千貫の生産がありました。昭
 和十三年には、地区の農産物七
 万六千余円のうち、米が三万四
 千余円で、園芸産物が三万七千
 余円と、米の生産を上回りました。
 これらは、止々呂美地区が
 北摂地方きつての果樹生産地に
 発展したことを物語っています。



(一六七九)は再び検地が行わ
 れ、村高も二二四石余りに増加
 しました。当時の記録を見ると

下止々呂美村の場合は、調査
 不足のため、その当時のことは
 不明ですが、鹿嶋五郎のとき副

横な製炭の行われていたことが
 よくわかります。
 この一例からも推測されるよ

うに、止々呂美地区の主要産業
 は、農産もさることながら、商

同村では「しぶがき、すもも、
 を小宛売」となっており、農産

不明ですが、鹿嶋五郎のとき副

横な製炭の行われていたことが
 よくわかります。
 この一例からも推測されるよ

うに、止々呂美地区の主要産業
 は、農産もさることながら、商